



チェルノブイリ事故から 30 年 <支援を続けて四半世紀>



<感謝状を受け取る河田理事>

ジトーミル 州議会と 市から感謝状!!

4月25日夜半に、ジトーミルに到着したスタツア参加者（16名）は、翌26日朝から4ヶ所の追悼式典に参列し、黙祷・献花をしました。

ウクライナの事故処理作業（リクヴィダートル）たちは「地球を救った英雄」として称えられ、毎年この祈念日には彼らを想い、彼らの行った作業に頭を垂れて、追悼・献花が続けられています。

私たちのウクライナ支援は、「放射能に汚染していない粉ミルクを赤ちゃんに贈りたい」という、母親の願いから始まりました。

その後、「放射能」という終わりの見えない災害に対して、私たちの支援は今日まで続けられてきました。

この感謝状は、26年間の支援活動を支えてくださった、皆様お一人お一人に対するものです。本当にありがとうございました。

そして、これからも引き続きご支援をよろしくお願いいたします。（美）



感謝状

慈善団体
「チェルノブイリ救援・中部」様

チェルノブイリ原発事故 30 周年にあたり、チャリティーのご支援と、ジトーミル州でのチェルノブイリ原発事故の影響克服における多大なるご貢献に感謝いたします。

ジトーミル州議会議長
A.V.ラブシカ
2016 年 4 月

〒460-0012 名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST プラザ鶴舞 5 階 B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京 UFJ 銀行 名古屋営業部（店番号 150）

口座 番号：普通 6949211

口座 名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便 振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813（月・水・金 10:00 ～ 17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

★第 11 期南相馬市、第 7 期浪江町放射線量率マップ作成の測定を、4/16-17・23-24 に実施しました。前半は、全国からの 14 名と地元 20 名、後半は、全国からの 11 名と地元 16 名のボランティアの協力により、天候に恵まれ無事故で終えることができました。最近、沿岸部工事で立入禁止場所や区画変更があったり、山側では雨等で道が崩落状態だったり、測定不能地点が出てきています。

★3 月初めに、「公益社団法人 24 時間テレビチャリティー委員会」から、「非破壊式放射能測定器」の助成決定を受け、デモ機で測定実習を行っていましたが、4/27 に新品が納入され、正式に測定を開始しました。この測定器は、野菜・果物・魚等を細かく刻む必要もなく、測定することができます。測定結果次第では、食卓に上げる事も可能となり、依頼者にも好評で、とどけ鳥事務所も作業の効率が上がり、検体増への対応が可能になりました。

4 月測定時に採取した土壌測定は、5 月第 3 週に終わり、現在資料の取りまとめに入っています。5 月末完成のマップとともに、発表できればと考えています。(まずは、「第 11 期測定結果の考察 (P 10)」をご参照願います。)

★昨秋播種した「なたね」は 4 月中旬に満開となり、一面を黄色く彩り人々に元気を与えてくれました。萱浜地区の「菜の花迷路」では、今年も子ども達の元気な叫び声と笑顔が溢れていました。4/30 (土) には、全国から約 100 名の方々が集まり「第 2 回菜の花見会」が開催されました。萱浜・陣ヶ崎・太田・高地区と、満開の菜の花畑を満喫しながら巡回し、太田生涯学習センターにて、再生協議会女性陣のおもてなし料理を味わいました。相馬農業高校生や参加家族の子ども達も交えてのクイズ大会では、若く明るい弾んだ声に包まれ、楽しい交流会ができました。6 月中旬から、約 35ha の菜種収穫作業に入ります。昨年導入した乾燥機 1 台では、能力不足かと不安でしたが、ラッシュ(株)(英国)の助成により、大型乾燥機 1 台の追加が決定し、6 月初めに稼働します。

「油菜マヨ」は、1 年間製品の安定化に悩まされましたが、この問題も解決し、4 月から相馬市・大野村農園さんの「相馬ミルクエッグ」を使用、グレードアップしてニュー登場しました。(お中元用ギフトチラシ同封しています。是非ご利用ください。) 相馬農業高校生に商品開発を依頼していた「ドレッシング」は、「夏前までに完成したい」との発表もあり、より一層「6 次化商品」の拡大が進む予定です。



★5/15~22 の間に 4 回、行政による「避難指区域解除に向けた避難指区域内市民説明会」が開催されました。4 月 1 日からの解除は、反対意見が多く延期されましたが、【市民から要望のあった事項(除染ゴミが片づいていない、除染後線量が上がって来ている、医療・防犯・買物への心配等々)への基本的な作業は、4 月末迄に終えた。これから出てくるごみは、順次片づけていく。放射線への不安に対しては、環境放射線・大気粉塵・水道水・井戸水のモニタリングを継続して行く。除染については、事後モニタリングにより継続的に除染効果の維持を確認し、必要な場合はフォローアップ除染を実施する】等と、従来の考え方を再度述べるにとどまり、「具体的数値を出して対策する」といった回答はありませんでした。その中で、【7 月 1 日を解除日としたい】という提案があり、国・市としては、【これ以上、説明会は開催しない方針であり、5 月下旬の国・市の協議で決定する予定である】とのこと。1991 年に成立した「チェルノブイリ法」では、「健康被害」だけでなく、「放射能汚染を受けた地域に居住・就労することに伴うリスク補償」を盛り込み、「原発事故がなければありえない、追加被曝と環境や衛生面での規制を強いられることに対して補償して行く」と明記されています。「解除ありき」ではなく、長期にわたる放射線防御に対する対策を、数値目標を設定して実施する必要が強く望まれます。そして、「避難が帰還か」ではなく、お互いの選択を認め合う土台となるべき「共通認識」が必要不可欠なのです。

<通常総会とチェル救デーのご案内>

30周年を迎えたチェルノブイリ ～スタディ・ツアー報告～ & 大内有子さんをお迎えして…交流会

- 日 時 2016年 6月11日(土) 午後 1時 30 分 ～ 4 時 30 分
- 場 所 名古屋YWCA 405室(地下鉄「栄」東⑤番出口より東へ2分)
- 参加費 500円/人

「チェル救 財政危機!!」 (T_T)/~~~

衝撃の事実であります...

しかし、1年に1回の総会、そしてチェル救デーです。スタツアの話で盛り上がり、福島からのゲスト大内さんのお話をじっくりうかがう、楽しい時間になりたいと思います。

深刻になっても始まらない! ぜひメンバーを叱咤激励しにお越しください。お待ちしております。

【第1部】

2016年度 通常総会

【第2部】

30周年を迎えたチェルノブイリ
～スタディ・ツアー報告～

【第3部】

大内さんのお話、交流会



大内有子さん

福島県福島市在住。福島市で果樹農園を営む。東日本大震災後は、被曝リスクの問題に取り組む活動を続けている。救援・中部の福島支援のきっかけとなった方。

<大内有子さんからのメッセージ>

今年は早々と梨の花粉交配作業がはじまり、連日畑に出ていました。

震災直後に、皆様から貴重な情報や測定機器のご提供をいただいた過程で、私自身が「被ばく者」として、何を見て何を感じてきたのか……。いつかお伝えしなければと思っていました。特に、福島在住の「女性」そして「農業者」という観点から、率直なキモチの部分も含めてお話しさせていただければ幸いです。

「支援者」と「被災者」という二つの立ち位置から見た「フクシマ」……。その見え方や情報発信の仕方の違いなど、それぞれの経験をシェアしながらお話できたら嬉しいです。「深刻でかわいそうで悲しい」だけの福島…というイメージを、そろそろ払拭したいと思います。

《お知らせ》 チェルノブイリ/フクシマ講座 第14回

「チェルノブイリ」とフクシマ 原発事故被災者と心をつなぐ交流会」

- 6月25日(土)10時30分～12時30分
- 名古屋NGOセンター(名古屋YWCAビル7F)
- 参加費 300円/人(避難者は無料です)

サマショーロとは、チェルノブイリ原発事故の立ち入り禁止地域に勝手に住み続け、避難先から舞戻って生活を続けている「わがまま者」と呼ばれる人々である。もちろん法的には違法だが、ウクライナ政府は「人間は死ぬ場所を選ぶ権利がある」として半ば容認している。当然中高年者が多く、当初は数百人いたが次第に減少している。放射能汚染があり危険な場所に、なぜ彼ら／彼女らは住み続けるのか。

森の中の老女

彼女と偶然会ったのは 2001 年 9 月、ウクライナのナロジチ地区の森の中で一人ぼっちで暮らしていた。名前はアナスタシア・イワーノブナさん（愛称ナースチャ）、当時 72 歳だと言った。チェルノブイリ事故から 15 年後だった。住民が皆避難し誰もいなくなった村で、彼女は牛 2 頭と鶏・ミツバチを飼い、犬と一緒に暮らしていた。誰とも会わない毎日のはずなのに、彼女は綺麗なスカーフをかぶり、美しい服装で牛を追っていた。「何故ここで？」との問いに、「私は身内も居ないし身寄りもないのでここで暮らすことにした。放射能は怖くないが電気が止まって不自由だ」とこぼした。小さな家の中は綺麗に掃除され、美しい壁掛けもあって、今にも客を迎えるのかと思えるほどにテーブルも整頓されていた。家畜を飼い蜂蜜を採って、畑を耕す毎日である。

恐らく原発事故前もそうだったであろう暮らしの何が、彼女を今も続けさせているのか、そこには本人も自覚していない何かがあるのかもしれない…と、様々な考えが頭をよぎった。それが確信に変わったのは、彼女の日常について聞いた時だった。実は、この森の村に入る途中の道路の交差点は、ナロジチに行く時よく通過する場所だった。そこには小さな教会があり、時々覗いて見ることがあったが、誰も居ない筈の村はずれの教会なのに、いつも綺麗に掃除がしてあり、花瓶には美しい野の花が活けられていて、不思議に思っていた。その話になった時、彼女はこう言った。「あれは私がやってるの。よほど悪い天気でもない限り、2km 先のあの教会に毎日通い、祈って掃除をして花を活けている。毎年一回、

クリスマスの時に村の人達が帰ってくるのが楽しみでね」。ちなみに、彼女の家の入口の放射線量を測ると、1.7 μ Sv/h だった。同行した消防士は、「危険だから早く立ち去ろう」と私を促した。帰国後もずっと、彼女の事が頭から離れなかった。彼女は単に、「故郷を離れたくない」という思いだけで生きているのではない。明らかに事故前とは違う人生を選んだ結果だと思った。

人間と人生の選択

人間は人と人とのつながりの中でこそ生きられる、という。福島原発事故でも友人知人と離れ、家族とも離散する困難は 5 年経った今も続いており、それを問題視しない人はいない。人間は、コミュニティを作り共に暮らすことが幸せであり目標だ…という考えは、一般論として当然である。しかし、原発事故という強制力がきっかけにせよ、サマショーロという生き方を選んだ瞬間から、その人は別の人生を歩み始めたのだ。頼るべき他人も無く、社会とも隔離し、変転する自然の流れの中の一人ではない。その事を改めて自覚し、自らを律し、強くならなければサマショーロにはなれない。日が昇れば目を覚まし、日が沈めば寢床に就く。そんな日々を過ごせば、自らが自然や地球の一員として生きている事を、自覚せざるを得ないだろう。

ナースチャは、神と自然との対話を通じて日々を生きていたのではないだろうか。福島原発事故でも、敢えて汚染と向き合い暮らしている人々がいる。彼ら／彼女らの思いに、真摯に向き合う必要があるのではないだろうか。

（2016 年 5 月 16 日 河田）

4年目の保養、今年もやります！

＜信州・伊那谷 親子リフレッシュツアー＞

（原 富男）

東電福島第一原発事故では、多くの方が被災し、5年を経た現在でも復興の見通しが立たず、生活に支障をきたしている状況にあります。特に、原発事故のため故郷を離れざるを得なかった方々は、現在でも 10 万人以上おられます。



増える小児甲状腺がん、前回調査比 14 名増の 166 名

また、今年 5 月の福島県「県民健康調査報告」では、福島県の小児甲状腺がん（悪性または悪性の疑い）は、前回調査に比べ 14 人増えて 166 名となりました。放射能の健康への影響に不安を抱きながら、仮設住宅で暮らしている方が多くいらっしゃいます。放射能の影響は、子ども達により多くもたらされます。

私たちは、放射能の影響を減らし不安やストレスを和らげる支援として、福島県内外の影響を受けた地域の親子を伊那谷にご招待する「伊那谷 親子リフレッシュツアー」を、今年も 7 月 22 日～25 日伊那市長谷において計画しています。

今年は、カヌー・乗馬・イワナ手掴み・水遊び・おやきづくり！

これまで 3 回のツアーには、福島県南相馬市を中心とする親子が参加し、野菜収穫・蕎麦打ち・乗馬・水遊びなど、「放射能のない自然生活」を満喫しました。今年は、カヌーを格安で教えてくださる方が現れました。

ツアー実施にあたり、実行委員やスタッフはすべてボランティアで参加しておりますが、バス代の負担が大きく重荷となっています。

ツアー費用は、年間 120 万円程かかります。現在 40 万円程、不足しており、各方面からのカンパに頼らざるを得ない状況です。参加者の負担を極力減らすためにも、皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします！

【振込先】

ゆうちょ銀行

普通口座：記号 11120 番号 24082951

口座名義人：伊那谷親子リフレッシュプロジェクト

八十二銀行 伊那市駅前支店

普通口座：口座番号 342189

口座名義人：伊那谷親子リフレッシュプロジェクト

【問い合わせ先】

代表 原 富男 上伊那郡南箕輪村 9955-2

TEL 0265-73-9355

伊那の保養スタッフで「福島スタディ・ツアー」計画

今、「親子リフレッシュツアー」を行っているメンバーの中で、「福島スタディ・ツアー」の計画が持ち上がっています。

- ① 保養ツアーに参加した子ども達と、南相馬市で再会し交流する。
- ② 保養参加者の現地取りまとめをしてくださっている団体「こどものつばさ南相馬」と、今後の保養について話し合う。
- ③ 子ども達のおかれている状況を把握するため、「放射能測定センター・南相馬（とどけ鳥）」で学ぶ。
- ④ 相馬農業高校の生徒も参加している、「ナタネ栽培・ナタネ油生産」による農地再生の取り組み「ナタネ種まき会」に参加し交流する。

…という計画です。保養スタッフは、知識としては福島の状態を知っているのですが、実際に福島を訪れた人は少ない状態です。伊那にいらっしゃる親子のおかれている様子を知ることとは、今後の取り組みに大いに役立つと思います。

おかげさまで、皆さまのご協力のもと、元気に帰ってきました！

(神野 美知江)

思い起こせば、次年度は「チェルノブイリ 30 年・フクシマ 5 年の節目の年に当たる」…という発声で、「追悼式典には必ず出席しなきゃ！」という思いが沸いたのは、昨年 6 月のことです。とにかくチラシを作って募集を…と、さっそく「仮旅程で見積りを出して欲しい」と旅行会社へのメール攻撃を始めました。そして参加予定人数は「(例年通りなら) 10 人くらいかな？」と軽い気持ちで伝えました。企画担当としては、そのつもりでした。

当初、集まりは芳しくなく、10 月末の一次締め切りでは 10 人をかなり下回っていましたが、「それはそれで眼が届く範囲で良いね」…と安堵していました。ところが、年が明けてメディアで大々的に「節目の年である」との紹介がされると、申し込

2016 年		日 程
1	4/24 (日)	中部国際空港発 ⇒ヘルシンキ着
2	4/25 (月)	ヘルシンキ発 ⇒ボリスポリ空港着 バスでジトーミル市へ
3	4/26 (火)	30 周年 チェルノブイリ追悼祈念式典参列 児童絵画展オープニング ジトーミル市の人々との交流 (表彰)
4	4/27 (水)	ジトーミル市長との面会 (表彰) ナロジチ地区の人々との交流
5	4/28 (木)	キエフ市へ 「国立チェルノブイリ博物館」見学 プリピャチ市から移住した人々との交流
6	4/29 (金)	30 〰️圏内 (原発・旧プ〰️市) 視察
7	4/30 (土)	ボリスポリ空港発 ⇒リガ着
8	5/01 (日)	終日 Free (リガ歴史地区を視察)
9	5/02 (月)	リガ発 ⇒ヘルシンキ着 ヘルシンキ発
10	5/03 (火)	⇒中部国際空港着 着後、解散

みが一人また一人と増えて、気づくと 10 人を大幅に超えて。…「私で大丈夫かな？」と不安がよぎりました。結局、旅行会社のサポートもあり、出発したのは 16 人の大ツアーとなりました。

でも、まだ続きがありますよ。「ジトーミルから同行取材を…」とフランス在住のメディアグループからの申し込みがあって、ウクライナでは通訳を入れて最終的には 21 人。チェル救スタツア始まって以来の大所帯…大型バスの手配は、ホステージ基金のジェーニャさんのお手柄です。竹内さんを介して、何度も何度も確認メールのやり取りをしました。思い違いや勘違いを防ぐために、些細なことでも確認しておくというのは、とても大事なことでした。

でも、経費削減のため、博物館や郊外の集合住宅へは公共機関を使って移動することにしましたが、公共機関での移動時に私一人の眼では、全員を目視確認するのは不安です。そこで皆さんに「参加者名簿にある、自分の前後の方を確認してください」と、お願いしました。おかげさまで、誰一人行方不明になることもなく、すべてのスケジュールをこなすことができました。この方法は、今後も採用です。

ウクライナ国内は、アッという間の充実した 4 日間となりました。4 ヶ所の追悼式典への参加はもちろんのこと、26 年間の支援でお世話になった方々、未だに汚染地に住んでいる方々、移住を余儀なくされた方々など、いろいろな境遇の方のお話を聞いたことは、初めてウクライナを訪問した皆さんにも、きっと満足していただけたことでしょう。

30 〰️圏内の視察では、老朽化の進むチェルノブイリ原発 4 号炉の旧石棺と、建設途中の(日差しに輝くピカピカの)新石棺。

廃炉作業(チェルノブイリ事故の終息)は、まだまだこれからです。



26 年間のチェルノブイリ支援活動を振り返って

(戸村 京子)



チェルノブイリ事故から 30 年／フクシマから 5 年という節目の 4 月 26 日を、私はチェルノブイリ支援を通じて知り合ったジトーミルやキエフの被災者の皆さん、日本からのスタディ・ツアーメンバーとともに、現地で迎えました。

私は昨年、さらに遡って 20 周年、10 周年等、現地の祈念式典に参加してきました。この間、カウンターパート「チェルノブイリの人質」基金や各被災者団体の皆さんとチェルノブイリ救援・中部とは、いくつもの問題にぶつかりながらも、固い信頼関係を

築いてきました。支援の在り方についての「魚を欲しい人に釣竿を」論や、支援する側・される側の対等な関係など、議論を交わした「人質」基金代表のキリチャンスキーさん。今は天国で、私たちをどのような眼差しで見つめ、どのような言葉を投げかけているのでしょうか。きっとそれらは甘くはないでしょう。

私は個人的には、2006 年・キエフ大学での 1 年間の留学、2009～10 年の半年間のキエフでの研修期間にも、現地の方々から多くのことを学ばせていただきました。ジトーミルでの円卓集会で、一堂に会した皆さんにお送りしたメッセージを、感謝をこめて再度ここに記します。

2016 年 4 月 26 日には、チェルノブイリ事故から 30 年、そしてフクシマ事故から 5 年の年月が過ぎました。

ウクライナの皆さんと私たちは、1990 年 5 月から 7 月に、日本から「チェルノブイリ救援・中部」が書いた手紙と、「ジトーミルスキー・ピースニク」から受け取ったお返事を通して、初めて知り合いました。(中略)それは、8,000 キロの距離を超えた、奇跡のような出会いでした。その時以来 26 年間の長い間、私たちは友情を築き上げてきました。今では私は、もう何回ジトーミルを訪問したか、数えられなくなりましたが……。その年月の間に、私は皆さんと一緒に歳を取りました。「チェルノブイリ救援・中部」の活動は、私の人生そのものと言えます。その間には、喜びも、悲しみも、そして苦しみもたくさんありました。多くの人と知り合いになり、そして大切な友人であるホステージ基金のキリチャンスキーさん、ネチポレンコさん、消防局のヴァロージャさん、リクビダートルのタビノバさんたちとお別れもありました。

ご存知のように、今、日本は地震や津波、フクシマの事故など、大きな災害が続いて、多くの人々が苦しんでいます。ウクライナでも、戦争で多くの人が亡くなっています。しかし私たちは、それらを乗り越えて、生きていかなければなりません。私たち「チェルノブイリ救援・中部」は、日本の市民からの寄付金や、クリスマスカードのプロジェクトで、心の支援をジトーミルの人々に届けてきました。そして、フクシマの事故の被災者には、ジトーミルから多くの寄付金と励ましのメッセージをいただきました。もう一度感謝します。

現在、日本で私たちは連続講座を企画して、ジトーミルの母親たちが日本へ送ってくださった手紙を読んでいます。

そしてフクシマの被災者の母親たちは、その手紙によって励まされ、生きる勇気をもらったと言っています。

これからも私たちは、友情で励まし合いながら、困難を乗り越えて生きてゆきましょう。

(ウクライナ語でのメッセージ)



チェルノブイリ訪問記

(愛知県被災者支援センター スタッフ 瀧川 裕康)
参加の目的:チェルノブイリ原発事故死者を悼み30年追悼式に参加する。また「NPO 法人チェルノブイリ救援・中部」の支援26年を、会員と会員以外の参加者との間でその意義を共有し、現地の被災者の方々との交流を深めることで、福島原発事故5年の被災者への、今後の支援の方向性を学ぶことを目的とする。



4月26日16:00~18:40 ジトーミル市民との交流会

★円卓形式にて、私達ツアー参加者全員と、円卓に座りきれないほどのジトーミルの方たちとの意見交換会があった。ジトーミルの皆さんの非常に熱心なお話に、感動の時間が流れた。私の一番記憶に残る交流会だった。

1 州議会の方2名

20年以上の支援に感謝します。日本は広島・長崎に次いで福島の事故もあって驚いている。私が議長だった時にMRIを導入した。でも、被災者に十分な補償はできていない。州議会から『感謝状』がチェル救に贈られて、河田さんが代表して受けられた。

2 25番学校の生徒2名

ここまで育つことができたことに、事故処理作業者に敬意を表する。福島とチェル救に感謝し協力したい。5年前に放射能測定器を送るために募金活動をした。これからも福島を忘れません。

3 元ナロジチの局長、行政職員だった方(女性)

局長だった時にチェル救と知り合った。当時支援団体は100以上あったが、今も継続しているのはチェル救だけ。当時から、河田さんや戸村さんを覚えている。水道・薬・消防服などを支援してもらった。ジトーミル州の8,200人の作業者の内1,700人が死んでいる。児童の被災者は5,900人。ウクライナでは社会保障が実行されていない。ジトーミル州内で29,000人が避難。ナロジチからの移住者の村がいくつかある。

4 ラリータ(女性、ジトーミル州在住)

ギターを弾いて自作の歌を披露、初めの曲は悲しい曲だった。事故当時、妊婦だった。プリピャチの16階建ての集合住宅に住んでいた。当時1万3千世帯50,000人がいた。レストランやカフェもあった。私は音楽の教師で、夫は原発作業員だった。避難は3日間の予定で、身分証明書だけ持って出た。最後に2曲目を披露した。これはやや明るい感じのものだった。

5 ボヴクン(女性)

事故の前日(4月25日)に、プリピャチに引っ越した。直後の4月27日に、事故が原因で避難となった。その後夫婦は、別の原発に異動となった。子どもが頭痛と胃腸の病気で手術をして、心配なのでジトーミルに戻った。チェル救と知り合いになって嬉しい。広島や長崎のことがあったのに、支援してもらってありがたい。そんな日本人を尊敬し、感謝している。

6 ヘルマンチューク(男性)

チェル救の招待で、東京の「世界反核フォーラム」に参加した。事故当時、ソ連政府は隠していた。私は屋根の上で消火作業をした。直後に死んだ人の一人は、そのまま中で眠っている。

7 アントニューク(男性)

4月28日に、ジトーミル州の消防士が現場に入った。消火の限界を超えていた。289名の内107名が死亡した。私は消防局長だった。4号炉の上から5,000tの砂を投入した。その重さで炉心が下に沈んだ。危険なのでその底の水を抜いた(別途、その様子を記録した動画がある)。水を抜く作業は、シャツ1枚・マスク一つのみだった。

福島事故に対して、「作業を手伝います」と手紙を書いた。また、線量計が必要と思って送った。

5月22日と23日にはケーブル火災があって、その消火の指揮を執った。3号機、2号機、1号機に引火する可能性があったので、10分交替で作業して火を止めた。一人10分間で80レントゲンを被曝した。

日本で脱原発をやってくれれば、後発国で真似ができるのでやってほしい。

8 氏名不詳(男性)

25年後の福島はどうなっているのだろう。ジトーミル州内で、28,872名が腫瘍の診断を受けている。州議会でMRIを導入すると決められたが入っていない。法律で無償にて受けられることになっているが、国からお金が出ない。例えば、第1カテゴリーの障がい者の年金は7,000～8,000グリブナだったが、今は2,500グリブナになった。30年前には達成感があったが、今は気が沸かない。(戸村さんにお礼の花束が贈呈された。)

9 医療センター長(女医)

1994年に、河田さんや戸村さんと知り合った。たくさん事故処理作業者が運び込まれた。MRIは無いが他の機器は揃っている。30年も生きながらえている人がいて嬉しい。私は医師として健康を守るのが誇りである。

10 氏名不詳(女性)

行政の代表に言いたい。日本人と同じように、若い人に伝えないといけない。(この方のご提案により、全員で死者への黙祷を実施した。)

11 氏名不詳(リクビダートル基金の男性)

皆さんの支援に感謝している。「互いに平和であるように！」

12 氏名不詳(障がい者基金の女性)

30年が一瞬だった。感謝します。これ以上不幸にならないように祈ります。

13 コルジュ(夫婦)

薬局の仕事をしている。当時医薬品を配った。娘に4人の子がいる。

18:40 終了

チェルノブイリ事故 30 周年式典に参加して

(佐伯 恵子)

(抜粋) ウクライナの「その日」は肌寒く、そば降る雨がまるで天も泣いているようでした。朝から式典の場所に向かったのですが、最初の場にバスから降りた途端、その空気に私はいきなり胸が塞がれたようになりました。そこは、集まった人たちの追悼の気持ちで、埋め尽くされていました。その中で、私は涙が溢れてくるのを抑えられませんでした。それは4箇所全てで私が感じた、参列している周りの人たちの「思い」でした。

ある会場で哀悼の後、ふと誰かの手が私の肩に触れたので振り向くと、二人の年配の女性がしきりに話しかけてくれました。言葉は全く分からなかったけれど、気持ちは同じだということだけは通じ合い、三人で肩を抱き合いました。その一人は、私にカードを見せてくれました。そこにはお

そらく事故に関連して亡くなったであろう若い男性(息子)の写真がありました。思わず私は、その女性の胸に手を当て、私の胸にも手を当てて、それを繰り返していました。

その場所に行き、空気を、風を、日光を感じ、草いきれを感じ、木々のざわめきを聞き、生きている動物に触れる。そこで出会った人たちの手に触れ、声を聞き、目を見つめる。そして心を寄せる…こうしたことが私の中で種となり芽が出て、誰かに繋げることができたらと心から願っています。



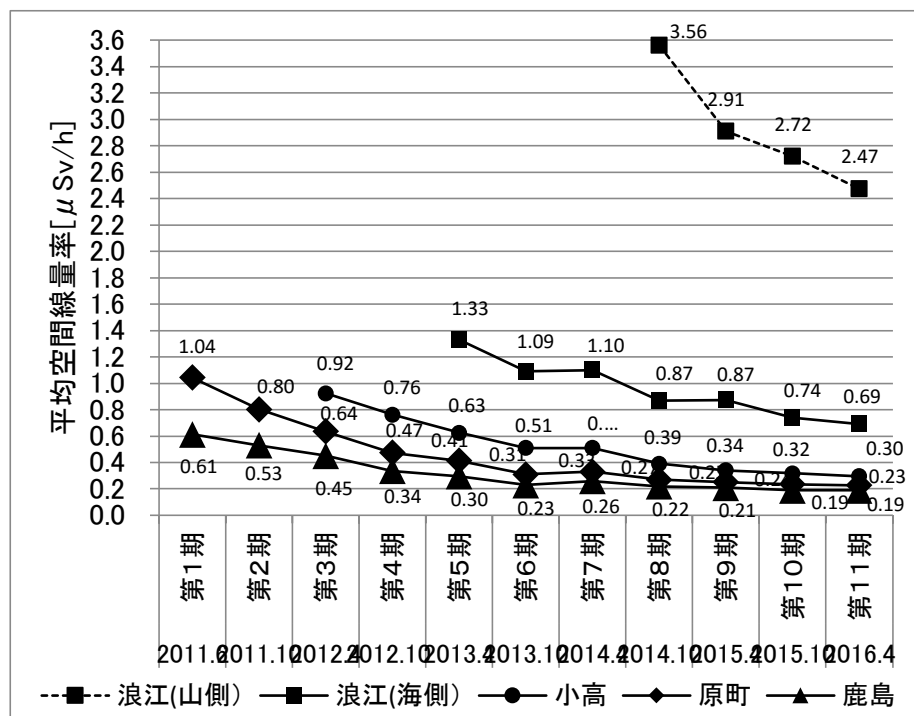
第11期(第22次・23次) 空間線量率測定結果

池田 光司

4月、第11期の空間線量率(空間の放射能の強さ)の測定が行われました。

福島第一原発事故から5年、半年毎に測定を行って空間線量率が変化する様子を調べてきました。下のグラフは、各地区の平均空間線量率の推移を表したものです。

今回は、グラフに1年半前の第8期から測定をはじめた浪江町の山側のデータも加えました。グラフから次のようなことが分かります。



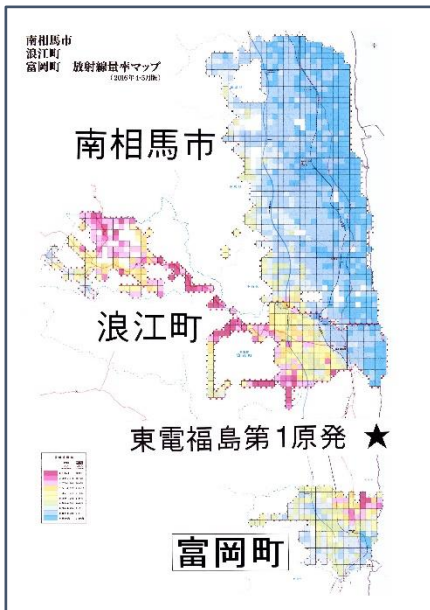
①鹿島区、原町区の平均空間線量率はそれぞれ0.19μSv/h、0.23μSv/h(放射能汚染のない所の2~3倍)まで減少してきています。ただ、ここ半年間の減少量は鹿島区0.00μSv/h、原町区0.01μSv/hで、減少はなかったように見えます。しかし、このレベルまで空間線量率が減少してくると、

放射性セシウムの物理的半減期から計算される減少量もごくわずかとなり(その理由については第10期の報告:ポレーシェ150号5頁を参考にしてください)、測定のバラツキを考慮すると、数字の上では減少していないように見えても不思議ではありません。実際は、物理的半減期に従って、ごくわずかですが減少しているものと思われます。

②浪江町(山側)は空間線量率が依然高く、平均で2.47μSv/h(放射能汚染のない所の数十倍)あります。ただ、ここ半年間で0.25μSv/h減少していて、物理的半減期から計算されるよりも50%ほど多く減少しています。

③これら①②の中間に位置する小高区、浪江町(海側)については、空間線量率はそれぞれ0.30μSv/h、0.69μSv/hで、ここ半年間の減少量はそれぞれ0.02μSv/h、0.05μSv/hとなっています。

減少量は、数字の上では小さいですが、物理的半減期から計算されるよりも少し大きくなっています。ここ半年間の減少だけでなく、もう少し以前からの長い目で減少の傾向を見るとどうでしょうか。詳細は省きますが、空間線量率は着実に減少してきていること、また、減少の割合は、当初空間線量率の高かった山側ほど大きい傾向にあることが分かってきました。空間線量率のマップを見ると、山側の空間線量率が下がってきているのが色の変化でよく分かります。マップは「チェルノブイリ救援・中部」のホームページ <http://www.chernobyl-chubu-jp.org/sokutei-map.html> でも、フルカラーで見ることができます。半年に一度の測定を積み重ねることで見えてきた、空間線量率の変化の傾向です。是非一度ご覧ください。



富岡町の放射線量率マップが完成しました。(井上 めぐみ)

私が富岡町に向かったのは2013年3月25日、富岡町の立ち入り制限が緩和された直後でした。きっかけは、同年3月初旬にボランティア仲間と静岡で開催した、被災地の写真展。そこで、富岡町から横浜市に避難、震災直後から富岡町の現状を記したブログ「ときぶーの時間」を発信しているNPO法人「がんばる福島」の副代表と出会い、後日、津波で破壊されたJR常磐線富岡駅をはじめ、富岡町全域を案内していただきました。そして、原発からわずか12キロの富岡町の自宅にひとり残り、残された家畜やダチョウや犬猫を保護している、同法人「がんばる福島」の代表 松村直登さんの活動をこの目で知ることができ、震災～原発事故、NPO法人を立ち上げた経緯、ふるさと富岡町の想いをうかがいました。「放射能汚染されたこの町、この富岡町で生きることが闘いなんだ」という言葉が、印象的でした。

2014年、町の除染作業が本格化。行くたびに変わりゆく町の風景、真新しい土の田畑、無数に積み上がる黒い袋、海岸沿いで煙を出す焼却炉。「これから富岡町でできる事はなんだろう？」そんな思いを持ちながら、2015年10月に初めてチェルノブイリ救援・中部さんの測定ボランティアに参加。「富岡町の地図も作りたい！」勢いで神谷さんに相談、快く応じてくれました。松村さんに提案。「やるべ！」その一言でした。2016年3月26日、第一期富岡町放射線量率マップの測定が行われました。南相馬市、浪江町、そして富岡町。でき上がった地図を、たくさんの方に手にとって知っていただきたい。この記事を読んでくださる皆さんにも、ぜひ見ていただきたいと思います。

“被災地支援カフェ”第2弾『南相馬うなぎカフェ』開催予告 !!

～ “川”と“鰻”から福島を見つめる ～

ご無沙汰しております。以前とどけ鳥ブログでお世話になったMくんです。

「ドタバタ菜の花物語」で勝手に菜の花プロジェクトを展開し、お騒がせしましたが、私はいま「名古屋生活クラブ」におります。

7月30日(土)ウィルあいちで、福島のことを考える・・・「うなぎカフェ」を開催します。昨年6月、販売不振に苦しむ福島の生産者を支援するため、『中村さんのお米カフェ』を開催し、「放射能とどう向き合ったらいいのか」を生産・消費・流通の三者で考えました。(ただし、その後、中村さんのお米は、放射能測定においても「不検出」となりましたが、依然として売上は回復していません。)

今回は、南相馬のうなぎ漁師、岩本照雄さんをお招きします。事故から1年半後の2012年8月31日、「これ測定してほしいんだけど？」と岩本さんが持ち込んでこられたウナギは約1,000 Bq/kg(食品基準値の約10倍)。結果を伝える私に、岩本さんは「そうか・・・」と一言。川を奪われ5年。岩本さんは人を笑顔にすることが大好きな優しい人です。いつもユーモアたっぷりにお話を聞かせてくれます。

『南相馬うなぎカフェ』開催予告!!

日時：7月30日(土) 10:00～14:00

会場：ウィルあいち セミナールーム 1.2
＜イベント内容＞

- ①岩本照雄さん(川漁師)の話：震災前と震災後のうなぎ漁について、被災地のいま、岩本さんの取り組み
- ②河田昌東先生の講演：川の放射能汚染、南相馬測定センターの取り組み、被災地の地域再生への動き
- ③夏休み企画「岩本さんから学ぶ！～親子で地震のこと、自然の楽しさのこと考えてみよう！～」

【お問い合わせ先】

名古屋生活クラブ たねまきの会

TEL 0120-72-0251(052-501-0251)

FAX.052-503-0967

E-mail:nsc@athena.ocn.ne.jp

事務局便り

春はなかなか忙しい事務所であった。2つの助成事業の報告書作成、第22次・第23次南相馬空間線量測定隊「派遣」準備。そして、総会に向け、事業報告・決算書・事業計画書・予算作成と、逃げられない仕事で忙殺される。この時期、仕事の夢で目が覚める気弱な...ホントに...事務局員約2名は（もう1名はいつも強気!）ため息。が、踵を返すがごとく、気弱なはずの会計ピンチヒッター・上田さんは、変身する。「もう、わからないのよね～」とか言いながら、きっちり厳密に会計仕事をこなしていく。こなしながら、如何にチェル救の財政再建をしたらよいのかに腐心する。どうやら、「再生再建」は四六時中頭をめぐっている模様。皆さま、「財政再建」へのご支援を！（山盛）

<チェル救の窮状の訴えにお応えいただき・・・>

前回ポレーシェ 152号で、チェルノブイリ救援・中部のご支援をお願いしたところ、早速、新規正会員・賛助会員へのご登録をくださった方が増え、そして一般のご寄付も多くなりました。心から感謝申し上げます。2015年度の決算監査も無事終わり、6月11日の総会で正会員のみなさまにご承認いただきたいと考えております。

私たちの活動は、皆様のご寄付で成り立っています。『応援したい!こんなことをしてほしい!』ということがあればどうぞ、チェル救にご提案ください。仲間になって一緒に考えてまいりましょう。また、友人・知人にも声を掛け、輪を広げていきましょう。引き続き、窮状は続いています。今後ともよろしくお願いいたします。合掌。（会計 上田）

編集後記

☆菜の花お花見会では、LUSHの女性スタッフ陣に潜入。チェル救内では感じたことのない華やき・・・。

平均年齢20代らしき彼女たちは、話題の「ゆとり世代」？ ゆとり世代、いいな～いいな～（佳）

☆この春の放射線量率測定では、縁あって富岡町の測定も行われた（P11）。経年変化が分かるので、富岡町でも続けたいとのこと。自分たちの町のことは自分たちの手で・・・。双葉町や大熊町でも声が上がるといいな。ノウハウは私たちの経験で！ ぜひ、お手伝いさせてくださいな。（美）

☆「パナマ文書」の流出が、日本を含む世界中の富豪たちを震撼させている。「タックス・ヘイブン（租税回避地）」を利用して利益（資産）を隠蔽し、税金のがれをすることは「節税（合法）」なのか？「脱法的節税」？ いや、れっきとした「脱税（確信犯）」である。日本の場合、あの有名な「ケイマン諸島」だけでも、60兆円（世界第2位）の租税回避が行われ、適正に課税されていたならば、その税収は約15兆円、2014年度の日本国の予算（歳入）の「消費税」や「所得税」（それぞれ約15兆円／年）に匹敵する。彼等がきちんと納税していれば、一般庶民が重税に悩む必要は全くない。また、今回の「パナマ文書」で流出した「企業名／個人名」は、真実のほんの一部に過ぎない。その流出経路や資金源を追及すれば、名前の挙がっていない巨悪（国際金融資本家）の正体も明らかになる。情報のリークは、やがてブーメランとなり、彼等自身の身を滅ぼすことになるだろう。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473